令和3年7月20日

無鄰菴茶道教室門下生各位

植彌加藤造園株式会社　無鄰菴管理事務所
茶道事業担当　千葉 宗幸（幸司）

【十二ヶ月色紙】

東福寺同衆院前住職　西部文浄老師筆

	本体	読み	意味
1		宝船（1月） **永き世の遠の眠りのみな目ざめ 波乗り船の音のよきかな** （ながきよのとおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな）	和歌の一首。この歌は最初から読んでも逆から読んでも同じ音になる「回文歌」である。室町時代の頃から、「初夢」文化のひとつとして日本で行われた風習に用いられた。「初夢」に「宝船」はこの歌が簡略化された名残りでもある。 宝船には珊瑚・金銀・宝石など、様々な宝物が積み込まれているという。そのため宝船はおめでたい船とされ、この船に七福神が乗っている様子をかたどった置物などが縁起物として親しまれている。
2		鶯（2月） **春遂鳥聲開** （はるはちょうせいをおってひらく）	春は鳥の声を追いかけて開く。逐は追うの意味で外にも沢山の意味がある。言葉では逐一、駆逐などがある。春というものが、鳥のさえずりを追うようにして訪れる。つまり物事にはその先触れとなる美しいものが存在するということ。
3		立雛（3月） **桃花千歳春** （とうかせんざいのはる）	桃の花は千年かわらずに春を告げて無心に咲いているという意味。中国において桃は、 仙木・仙果(神仙に力を与える樹木・果実の意)と呼ばれ、 昔から邪気を祓い不老長寿を与える植物として、 親しまれている。 桃源郷は、 俗界を離れた他界・仙境。 これは、陶淵明(365年～427年)が著した詩 『桃花源記 ならびに詩』に由来する。
4		桜（4月） **百花為誰開** （ひゃっかたがためにかひらく）	『碧巌録へきがんろく』第五則「雪峰尽大地せっぽうじんだいち」の公案の頌じゅにある言葉。寒風吹きすさぶ冬の時節は、見渡す限り枯野原でも、ひとたび春風が吹けば、何処どこからともなく次から次へと青い芽を出し、たちまち緑をつけて、一斉に花を咲かせる。梅、桃、桜、牡丹ぼたん、五月さつき、つつじ等が、まさに百花繚乱ひゃっかりょうらんと咲き乱れる。

	本体	読み	意味
5		花菖蒲（5月） **薫風自南来** （くんぷうみなみよりきたる） （くんぷうじなんらい）	人は何かというと得失にこだわり、利害にとらわれ、愛憎にかたより、善悪にこだわり、迷悟めいごにとらわれ、凡聖ぼんしょうにかたよって、右往左往する毎日。しかし、それらの対立的観念を一陣の薫風によって吹き払ってしまえば、こだわりもなく、とらわれもなく、かたよりもない、自由自在なサッパリとした清々しい涼味りょうみを感じることが出来る。
6		垂釣（6月） **清流無間断** （せいりゅうかんだんなし）	暑い季節に涼しさを誘う禅語。 清流無間断碧樹不曾凋 （せいりゅうかんだんなく へきじゅかつてしぼまず）「禅林句集」の前の句。 清らかな渓流はこんこんと流れて絶える事がない。常緑樹もいつも青々として決して凋む事なく永遠に碧を保っている。 「清流」と「碧樹」は「悟りに向かう心」「完成を求める心」。 求める心を絶えることなく持ち続ければ、水も濁らず。
7		朝顔（7月） **金風初動露華滋** **看得朝暉未上時** （きんぷうはじめてうごいてろかしげしみえたりちょうきのいまだのぼらざるとき）	早朝、秋風（金風）のようにさわやかな風が吹き草草には露が光っている。 金風とは そもそも陰陽五行説で 秋は金にあたることから秋に吹く風の事。
8		萩（8月） **秋色静中生** （しゅうしょくせいちゅうにしょうず）	秋の気配が静中から、音も香もなく漂い生じてきている。

	本体	読み	意味
9		菊（9月） **風露新香** （ふうろあらたにかおる） ※隱逸花 （いんいつのはな）	利休の徳を、孤高隠逸な菊にたとえ気高いその香をたたえた句。 千利休が居士号を勅賜されたとき、参禅の師である古渓宗陳（こけいそうちん）和尚が贈った賀頌の一節。 柴山全慶編『禅林句集』には、「涼風にゆれ朝露にぬれて菊の花が新鮮に香つている。悟境の妙趣をいう。古溪和尚が利休居士に與えた居士號勅賜の賀頌の一句。隱逸花は菊花の異名」とある。
10		柿（10月） **結果自然成** （けっかじねんになる） ※一華開五葉（いっかごようをひらく）	自分が行った事の結果は自然についてくる。今ある姿は自分が行った事の結果。ひとつの花は五弁（蓮）を開き、やがて自然に実をつけるという意。「人事を尽くして天命を待つ」と同様の言葉でもある。 やるだけやったら、あとは平常心で結果を待つのみ。人はえてして、まだ現れてもいない結果を気にして心を乱されるもの。いわゆる「危惧」は取り越し苦労だというが、結果を気にしなくなるくらい完全燃焼したかどうかが重要。
11		紅葉（11月） **林間煖酒** （りんかんにさけをあたためる） ※紅葉を焼く	林の中で落ち葉で酒をあたためて飲み、秋の風情をたのしむ。古代中国の詩人、白居易（はくきょい）の言葉。
12		白鷺（12月） **寒雲籠雪夕陽重** （かんうんゆきをこめてせきようおもし）	白隠彗鶴（はくいん・えかく）という江戸時代中期の禅僧の語録に「寒雲、雪を籠めて夕陽重く、山月、梅に上って夜色清し。」という言葉があり、釈迦が真理に到達した際のありようを表現した言葉で、その時々の目の前に現れていることに行うべき正しい道が現れている（生きとし生けるものや無生物にも仏陀となる可能性は秘められているのである、ということ）。

※転用や二次利用はご遠慮下さい。